

研究活動

氏名 戸來知子

著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は 発表 の年月	発行所、発表雑誌又は 発表学会等の名称	概要	編者・著者名 (共著の場合のみ記入)	該当頁数
(著書) 教職基礎論	共著	2009. 4 (平成21年4月)	サンライズ出版	教職に就いた時に実践的に使える基礎知識がまとめられている。その中で、カウンセリングやエリクソンのライフサイクル論について、教育相談や生徒指導の基礎的な考え方を述べている。	伊藤一雄・山本芳孝・池上徹・奥山研司・中西仁・山脇雅夫・戸來知子	pp. 76-82.
(学術論文) 『『知育』としての教育が自我形成について果たす役割について-考察-E.H.エリクソンとP.H.フェニックスの理論に基づいて-』	単著	2009. 4 (平成21年4月)	関西教育学会年報通巻第3号	P.H.フェニックスは『意味の領域』や『コモングッドへの哲学』において、学校教育の教科の学習では、何をどれだけ学ぶのが適切であるかを論じている。さらに、エリクソンの理論を援用して学習と発達段階を考慮している。本稿では、学校教育の教科の学習とアイデンティティの確立との関連性について論じた。教科として学ぶ歴史や自然科学の知識は自分自身を客観的に見つめることに貢献している。「知る」ことで初めて見えてくるものは多く、価値発見のプロセスはアイデンティティ形成に寄与していると論じた。		pp. 36-40.
「経験と自我の成熟との関連性-E.H.エリクソンの理論に基づいて-」	単著	2010. 10 (平成22年10月)	日本デューイ学会紀要第51号	本稿ではエリクソンのライフサイクル論に基づいて、経験するということが自我の成長・発達にどのように関わっているのかということを論じた。ライフサイクル論では、乳児期から自我の強さの積み重ねで、人間は成長していく。自分の経験は「心理-社会的な経験」として捉え直される。その時に、同時に「意味経験」という自我の経験が作用していることを論じた。他方で、自我の強さを育む経験は、人と人とのかかわりあいである「相互性」によっても支えられている。「相互性」と「経験」の相補的な作用について論じた。		pp. 101-110.
「自我と他者性との関連性-E.H.エリクソンの理論に基づいて-」	単著	2012. 10 (平成24年10月)	日本デューイ学会紀要第53号	概要:本稿では、エリクソンのライフサイクルに含まれる超越性の問題を「内的超越」として、自我と相互性の観点から人間の成長を論じた。ライフサイクル論では、ひとは他者を通して「自分」というものが認識できる。特に人生の後半では「育てる」ことを通して育てられている。「老年期」では「究極的な他者」の存在が死をも乗り越えさせる力を持つことを考察した。 (pp.53~62)		pp. 53~62.
「E.H.エリクソンのライフサイクル論における横軸への超越についての考察-J.M.エリクソンの老年的超越からの示唆-」	単著	平成26年12月	名古屋大学大学院教育発達研究科紀要(教育学)第1巻第1号(査読有)	ライフサイクル論において「超越」の問題を論じることを試みた。エリクソンの死後に妻のジョーンは、八段階のライフサイクル論に「第九段階」を付け加え、そこでの課題を「老年的超越」であるとされた。しかし、ライフサイクル論そのものにも「超越性」が含まれているということはこの論文において論じた。手がかりは、エビジェネティック・チャートの時間の捉え方と、ジョーンが「第九段階」を論じるのに仏教の考え方を参考にしたと記していることから、仏教の「内的超越」を援用しているところにある。ライフサイクル論における「超越」は、涅槃は今、この瞬間にこそあるという感覚に近いものだ結論づけた。(pp.47~58)		pp. 47~58
統合と生涯教育との関連性-E.H.エリクソンの理論に基づいて	単著	平成24年 3月	京都精華大学紀要	生涯学習社会といわれる今日においては、教育は将来の準備という側面だけではない。リカレント教育やアンドラロジーという教育の考え方が広まり、社会人になっても学び続けることが一般的に見られるようになってきている。本稿ではリンデマンの考え方に依拠して学ぶことの意味を考察した。学習指導要領との関連では、ホームルーム活動での「学ぶことと働くことの意味の理解」が挙げられる。 (pp.172~181)		pp. 172~181

<p>ライフサイクル論における遊びと超越に関する一考察-E.H.エリクソンの理論に基づいて-</p>	<p>単著</p>	<p>平成26年 3月</p>	<p>京都精華大学紀要 第44号</p>	<p>エリクソンは、著書、『玩具と理性』において、子どもの遊びが発達に大きく貢献していることを論じている。遊戯療法や、ホイジンガの見解を援用して、遊びが「自己超越」的に子どもの悩みを解決している。遊びが問題解決に寄与することは、子どもだけでなく大人もまた然りである。しかし、エリクソンは、「大人」にとっての遊びは、往々にして「遊び」に人が騙されてしまう危険性があることを指摘している。遊びの健全性は皮肉にも「儀式化」によって守られていると論じた。(pp.148～155)</p>	<p>pp. 148～155</p>
<p>ライフサイクル論から見た「遊び」と「芸術」に含まれる超越性</p>	<p>単著</p>	<p>平成27年7月</p>	<p>日本イギリス理想主義学会・イギリス理想主義研究年報第11号</p>	<p>ライフサイクル論との関連で、人間が「超越」的に成長していくことを論じた。遊び・芸術・宗教等はその内側に「超越」的な要素を含んでいて、私達が普段、生活している中で抱える様々な問題や悩みを解決する糸口になっている。子どもが学校行事で演じるお芝居も、楽器の演奏も、その内側に子どもの成長を促す超越的な働きが潜んでいる。学校の文化的行事も学校の実態や生徒の発達段階及び特性等を考慮し、生徒による自主的、実践的な活動が次長されるようにするという、学習指導要領の指摘に関係している。(pp.101～110)</p>	<p>pp. 101～110</p>
<p>エリクソンのエピソード・チャートに示される二つの時間意識と発達課題</p>	<p>単著</p>	<p>(発刊予定)</p>	<p>名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要(教育科学)第64巻第2号 (査読有)</p>	<p>エリクソンのライフサイクル論を図式化したエピソード・チャートに示されている、八つの発達課題をどのようにして解決して次の段階に進んでいくのかということを、フロイトの研究に遡って闡明した。</p>	
<p>自己肯定感を育む学級活動-学校行事を中心にした取り組みから-</p>	<p>単著</p>	<p>平成29年3月</p>	<p>精華教育学研究 2016年度下期報告集</p>	<p>最近の生徒達の特長として、コミュニケーション力の低さや、他者理解の難しさ、自己肯定感の低さなどが指摘されている。高野山高校の取り組みを事例として挙げながら、特別活動としての行事などを、学級での活動として、自尊感情を育てることを基本にして、いかに指導していくのが良いのかを模索した。</p>	<p>pp. 133～142</p>
<p>ケアリングに基づく学級における教育相談の一考察</p>	<p>単著</p>	<p>平成30年2月</p>	<p>高野山論叢第53巻 (査読有)</p>	<p>N.ノディングスのケアリング倫理学に基づく学校教育のあり方が注目され、道徳教育にも取り入れられていることを踏まえて、教師が行う教育相談について、事例に基づいてケアのあり方を考察した。 (pp.63～70.)</p>	<p>pp. 63～70.</p>